

シリーズ 地域の達人 – 松本修二氏 –

ため池と生物多様性



松本修二

まつもと しゅうじ

高砂市在住、54歳。

播磨ウエットランドリサーチ代表
兵庫・水辺ネットワーク幹事
兵庫県農地・水・環境保全向上対策推進委員会委員

ため池は多様性が高いんです。
それを育む環境は地域の財産ですよ。

兵庫県南部を中心に、湿地・ため池に生育する植物の調査のほか、保全のために市民活動や啓発活動を行っている。環境を身近に考えてもらう絵本「メダカのコタロー」（東京声優プロデュース発行）を監修。オーストラリアの植物に魅せられ、毎年渡航して調査をしている。

生きものとの出会い

こういうことをしている人は、小さいときから生きものが好きなんですよ。魚を採ったり、植物採集したりね。私も10歳までにはやっていました。弟と一緒に。弟の方が熱心で、引っぱられるような感じでしたね。兵庫県の自然保護協会が出来たところからのメンバーで、自然観察会には、大人に交じって、僕ら子どもも参加していました。

私は、植物の栽培を中心にしています。山へ行って名前の分からない植物があれば「これは、なんや？」ということで採集して、家で育てていましたね。それが、発端です。

栽培をするとね、常時観察もできるし、植物の一生を調べることができるんですよ。今は調査に行って、いろんな植物が見られることが楽しみです。こんなところに、こんなもんが見られた。今日は何が見つかるかな。どこに何があるんだろうって。

ため池の保存活動に関わる人たちの熱意

ここ7、8年前くらいから、兵庫県はため池や圃場整備の事前調査をして土地改良工事に入るんです。どんな環境なのかを調べ、保全できるところは保全する。兵庫県の土地改良の取り組みは最先端ですよ。

私が代表をつとめる播磨ウエットランドリサーチは、地元の人に観察会をしたり、自然の大切さを説明したりしています。たとえば、ある池を工事するとしますよね。事前に私たちが、ため池を構成する3つの環境（水の中・土手・湿地）を調査して、観察会と地元説明会を実施します。工事の配慮や可能な範囲で市民に守ってくださいと提案するんです。その後、工事に入るんですよ。本当は、地権者とか水利権者しか関係ないんですけど。最近は農業を行なわない人でも、ため池が地域の財産なのだと思っている人も増えました。観察会に親子で参加してくれるのはいいですね。夜の地元説明会も来てくれます。

ため池や湿地、圃場の調査は、四季をとおして年に2回ぐらいはしたほうがいいですね。私自身は、年間平均50日ぐらいは調査に出て、仕事か休みの日は、たいいてい、ため池や湿地の現場ですね。調査結果に基づき工事に際し生きものに配慮しなければならないことを説明し、どのようにすればいいのかも提案します。その結果、工期は延びる、お金はかかるし、工事する業者に十分説明しなければならないし、工事サイドにとっては大変なことばかりです。兵庫県の土地改良の人の熱意がなければ成り立ちません。だから、我々の活動は今、波に乗っていると言えるのではないのでしょうか。

絶滅危惧種と外来種

身近なため池とか、水路、田んぼ、あぜ道。そこにはかつて、たくさんいたと思われた生きものが、いなくなっています。このあたりは雨が

少なく瀬戸内気候で、ため池がたくさんあります。止水域にしか見られないような絶滅に瀕した生きものは、深山溪谷へ行かなくても、兵庫県のため池で見られます。池の立地条件によっては水の栄養条件が違うから、生える種類が違います。

土手環境もいろいろありますよ。多様性が高く、本当におもしろいです。みんなにもっとPRする必要がありますね。いつの間にか、外来種が勝っているために、最近では日本に本来あった生態系が脅かされており、アンバランスな食物連鎖が起こっています。「ここにこんなんがあったんちゃうんか」っていう、今までの流れ、地域の特性が分かってもらえる生涯学習の場が大事ですね。そして、今回の生物多様性ひょうご戦略には、最も身近な環境である農地を含む里地里山の環境の重要性を浮き彫りにしてほしいですね。ここは人間の営みが生物多様性を確保しています。土手や畦畔の草刈、ため池の水抜きなど定期的な維持管理作業により多様性が保たれていることです。私たち播磨ウエットランドリサーチは、このことを訴えており、地域活動の一環で土手の草刈などの維持管理に地域をあげて取り組むことが重要であると考えます。

市民活動を通して伝えたいこと

地域の学校などで身近な自然の話をする機会があります。子どもたちには、植物の話をしてもし難しいのか興味をひかないので、魚や水生昆虫を中心に話します。「こんな生きものが身近にいる、こんなんがおる環境はどうなんや。」「生きものがおるためには、どないしたらいいと思う。」「もともとおらへんかったカメが増えて、日本のカメがおらんようになってもうてんで。」子どもたちには、「川を整備するときに生きものから見た川とは、どんなんや？」って、自主的に考えさせます。「外来種はあかん」とかいう率直な意見もありますね。家の人と出かけて、捕って、育ててみたらいいんですよ。育てないと分かりませんから。手もかかるし、死んだら可哀想って、あんまり飼わないですけどね。子どもに、きっかけを与えてあげることが必要です。

最後に

みなさんには、2つ伝えたいことがあります。時間をかけて遠くの高い山に行かなくても、身近なところでも、いろんな自然が見られます。もっと、近くの自然環境に目を向けてほしいです。例えば、ため池、水路、田んぼ、里山などの散歩ですね。

もうひとつは、水草などを鑑賞や観察のために育てることはいいんですが、増えた株をその辺に捨てないようにしてほしいのです。可哀想、もったいないって、池などに捨てると多くの場合、増えてしまうのです。元々いた種類に大きな影響を与え、本来あった生態系を壊してしまっています。



上／湿地調査で確認したトキソウ（ラン科）群落
中／加古川市で野生絶滅のフサタヌキモの系統保存
下／貴重な山間湿地での遷移を止める伐採作業

生物多様性 ひょうご戦略

ただいま
策定中!

生物とのよりよい関係を築くために

私たちは、自然に手を加えずに、逆に維持管理を怠ったりしたために、気づかないうちに生物から得られるはずの恵みを失っています。また、私たちの兵庫県の生物多様性についての知識は乏しく、兵庫県に一体どれくらいの生きものがいるのか？ということも正しく知りません。生物とのよりよい関係を築くためには、今以上に生物多様性を学び、多くの人々が協力して生物多様性に関わることが求められています。

そこで現在、兵庫県では今年度4月より、それらの活動を効果的に進められるよう、『生物多様性ひょうご戦略（仮称）』という生物とのよりよい関係を築くための指針づくりを自然環境課が中心となって進めています（もちろん、ひとほくも全面的に協力しています）。この戦略では、これまでの県の取組をふりかえり、今までに足りなかった県庁内部局間の連携や市民・NPOの活動への支援をスムーズに行えるよう、生態系レッドデータブックや外来生物ブラックリストなどの生物多様性に関する公開情報の充実をはかり、市民から行政まで生物多様性に関する事業の相談をすることのできる生物多様性アドバイザー制度をはじめとする様々な制度を整えることを目指しています。

12月中頃にはみなさまから意見を伺う「パブリックコメント」を実施する予定です。ぜひ兵庫県やひとほくのHPでの生物多様性に関する動きにご注目ください！

（橋本佳延 自然・環境再生研究部）



武庫川河川敷のオギ原と周辺の里山風景（兵庫県篠山市当野）



様々な写真の報告書

生物多様性を支える人たち

「農家に生まれ、農家で育ち、農学部で学び・・・」云々のことを、ひとほく手帳に書きましたが、私の原風景は、かれこれ50年程前の生物多様性を支える農家の生活の中で育まれましたと言ってもいいと思います。わが家のカド（にわ）周辺には、モモ、クワ、カキ、グミ、イチジク・・・などの食用や有用植物が植えられ、カドには四季の野菜や草花が栽培されていました。さらには農作業後の落ち穂やミミズなどの土中の生きものを啄むニワトリも飼育されていました。かれらはお正月やお盆には、重要なお祝いの食材になっていました。多くの生きものが生活と共生していました。まさに、今言うキッチン・ガーデン、あるいはエディブル・ランドスケープであったといえます。

春の田ならし、苗代づくり、畦塗り、アゼマメ（枝豆）の播種、そして田植え、その後の水管理や畦の草刈り、そして田刈やいなぎ干し、脱穀作業・・・、これらはいうならば多様な生きものの住処を提供し、共生していたといえます。梅雨時の出水時に産卵のために排水路を遡上するフナ、コイなどを取る「アンコウ（網で編んだもんどりのような仕掛け）つけ」は子ど

ものごころのワクワクした素晴らしい思い出です。川をせき止めて集落総出で、フナ、コイ、ウナギ、ナマズ、モロコ、ドブガイさらにはスッポンなどまで捕獲した「かいぼり」も忘れられない思い出です。二百十日、二百二十日には、集落の氏神さんで、稲を水害から守って貰うためのお百灯をあげる手伝いをしたこともありました。

冬の農閑期には、集落の有志で近くの山のクヌギやコナラなどの立木だけを買とり、山仕事、薪づくりをしていました。これらの樹幹を一定の長さで切りそろえる仕事は子どもにはきついものでしたが、カミキリムシやカブトの幼虫に遭遇するなど、思い出深いものです。

これらを教えてくれたのは、百姓として営々として働いてきた今は亡き祖父母達です。多くの農家は、自然のリズムの中で米作などの農業を営み、山仕事をしながら生物多様性を支えていたといえます。生業としての農業、林業が、里地・里山の生物多様性を支えていたのでしょうか。自然と人々の生業が良好な相互依存関係を保持していた頃のことです。

今でも多くの生きものたちは、かつてのように庭や垣根、農地、水路、道ばた、ため池、山林で

生息しています。では、兵庫の生物多様性を支える人たちとは誰なのでしょう。それは、かつてのような良好な自然と人々の営みの関係を維持するために仲立ちしてくれる人々ではないでしょうか。実際に農業、林業を営んでいる人々、自然愛好家の皆さん、そしてボランティアとして生きものの生息空間を守ってくれている人々など多様です。

これらの人々のお陰で、多くの生きものが守られていますし、農地では、生きものに優しい環境整備や有機農業、無農薬農業、アイガモ農業などが展開されています。里山では枝打ちや間伐作業などが展開されています。かつて生業として成立していた農林業が生物多様性を支えていたましたが、いまはボランティアの皆さんなどの協力の下で支えられている部分が多くあるといえます。

ひとほくの果たす役割は重要であると再認識しています。かつての生物多様性の基盤を作り出すためのハード技術の集積、農林作業など生物多様性を維持するためのマネジメント技術の集積、そして環境学習の推進や科学的な生きものの情報の収集や提供など、今以上に拡充していくことが大切であると実感しています。

（中瀬 勲 兵庫県立人と自然の博物館・副館長）